

第27回福井県公民館前期セミナー報告

地方創生における公民館の役割

平成28年7月7、8日あわら市グランディア芳泉 参加者100名

今年度の前期セミナーでは、東京大学

大学院教育学研究科教授の牧野篤先生に2日間にわたってご講義いただき、人口減少・少子高齢化が問題とされる現在の日本においてなぜ地方創生が叫ばれるのか、またこのような流れの中で、これらの公民館が役割を果たすべき役割とは何かについて考えた。また鯖江市市民協働課JK課の高橋藤憲氏、ふくい市の担い手づくりプロジェクト（公社）福井青年会議所（の後藤正邦氏のお二人にもそれぞれの実践についてご講演いただいた。



▶ 牧野先生

◇ 牧野先生講義より◇ 講義1

〈社会〉をつくる
行政の「学び」化
— 地方創生と公民館1 —

劇作家平田オリザさんの言葉を借りれば、衰退期を迎えているまことに小さな私たちの国、日本。もはや工業国家ではない。経済の拡大成長も見込めない。今やアジア唯一の先進国でもない。こういった寂しさを受け入れながら、これからは新しい社会をどうつくっていくかを考えなければならぬのではないかと

▽少子高齢・人口減少社会の何が問題か
高齢者、要介護者が増えること、労働力が減少すること、社会保障制度にお金がかかるなどが議論されがちであるが、過去の量的なモデルにしがみついていることこそが問題なのである。高齢化が

問題視されるあまり、今の若い人達は自分達の将来を悲観してしまっている。この現実の方が問題なのではないか。それよりも行政に頼るだけの社会のあり方や考え方を変えていく必要があるのではないかと

そこで大きなテーマとなってくるのが「ソーシャル(社会的)であること」と言えるだろう。国全体で出生数を30万人増やそうとすると、どうしていいかわからない。だが例えば人口1300人で、毎年子どもが10人生まれている町で、あと3人増やそうと考えるならば、具体的に手立てを考えることが見込めそうではないか。国家という単位で物を考えるのではなく、もう少し小さな単位のコミュニティ、地域社会を基本に考えていくことが重要なのではないかと

▽価値観の転換

工業社会から消費社会へと日本が転換を始めると、皆が同じ価値観を持って競争していた時代が終わり、価値観は多様化していった。しかし今度は比較優位の競争となつて異なる価値観同士がぶつ合いついてしまった。それは社会的活力の低下につながってしまう。

そうではなくて、様々な価値を新しく

作り出し続けていくことで、その創意工夫を楽しみ、生き生きと自分達がこの社会に生きていけると思えるようにしていくことを考えるべきではないか。その意味でも社会基盤であるコミュニティを住民自身が経営することを目指していかねばならないだろう。住民が社会で活躍しお互いを認め合っていく。その中で自分の価値を見出していくことが実現できれば、国という単位で考えたときにも価値観豊かな国になつていくのではないかと

▽公民館の役割

人々が自分達でコミュニティを作り上げていく、自ら経営していくときの基盤となりうるのが公民館であり、それを支える職員の方々だと言えるだろう。

今年公民館構想が出されてから70周年という年であるが、昭和21年に出された構想を見ると、公民館とは住民が新しい村や社会を作りそれを経営していくときの核になる存在だとされていたことがわかる。工業社会だった時代のニーズでまちづくりや経済を扱うことよりも文化教養を広めていくことが多くなつた公民館だが、本来はそれに加え生活の基盤である経済も取り扱う、または産業おこし、村おこしまで扱うべきものとしてあった。

そのことが今、改めて再評価されているのである。

▽新しい専門職

またこれからの時代に必要なのはリーダーシップではなくてフオロワーシップと言われている。地域の住民とともに生活し、その人達が持つている言葉にならない思いを聞き取り、それを言葉にして返していきながら、自分達で新しい社会をつくっていくるように議論が出来るような人々が

新しく専門職と呼ばれるようになっていくと考えられている。

これからはこうした人達を養成したり、身分を保証したりしていくことで、行政はお金を使って行政サービスを提供することだけでなく、住民が自分達で学び、自分達の生活をつくりあげていくことを支援できる仕組みをつくっていくことができるとはならないか。この「行政の『学び』化」をいかに実現していくかが今、問われているのではないだろうか。



この1日目の講義を踏まえ、2日目の講義『社会をつくる基盤としての市民―地方創生と公民館2―』では先生のこれまでの実践の中からいくつかの例をお話いただいた。

(1) 岐阜くるるセミナー

2001年、大学と銀行が連携して高齢者の社会参加を促すために始まったセミナー事業。「くるる」とは活動的なシニア世代をイメージして「聞く」、「見る」、「する」の語尾をとって付けられた名称で、くるると循環するイメージもあわせ持つ。企業を退職した男性へのアンケート結果を受けて趣味や健康などのセミナーを開

講。初めは無料で受講できる基礎セミナーで新しい生活や楽しみ方を学んでもらい、発展セミナーからは有料で参加者が

自分達で運営していく。セミナーを通して人間関係が出来ていくにつれ、参加者達は楽しみながら活動を様々に展開させている。銀行としても社会的な価値の高い活動をしているとの認知が広がっており、収益の向上につながった。

(2) 千葉県柏市の「くるるセミナー」

高齢化が進んでいる団地で地域の人々のネットワークを作り直したいとの希望を受けて始まったセミナー。後に活動範囲を中学校区まで広げて多世代交流型の活動「タマゴプロジェクト」へと展開。コミュニティカフェをオープンし、住民の交流が深まる中、「子育てに優しい地域」だと評判が立ち、若い世代が移り住むようになってきた。

(3) 過疎・高齢中山間村支援事業

愛知県豊田市の過疎が進む山間地域において、都市部から若者を呼びこもうと始まった事業。「農村でロハスな生活スタイルを作りませんか」との公募で集まった10人の若者達は、農業を通じて地元のおじいちゃん・おばあちゃん達と信頼関係

を築き、今では全員ここで就職している。結婚して子どもが生まれるメンバーがいたり、子どもがいる世帯が引越してきたりして、元々は人口約30人の集落だったのが現在60人ぐらいにまで増え、4割を超えていた高齢化率が2割台まで落ちてい

る。小学校は廃校になってしまったが地域全体が学校になればと教育特区の申請を始めたり、地域全体をグループホームにしようという動き、またエネルギー自立圏をつくらうという動きもあって、今やこの農村地帯は新しい社会づくりの最先端の地域と言えるかもしれない。

このほかにも子どもたちを社会のメンバーにするための取り組みなど、いずれも住民が学びを通してつながりを取り戻し、地域社会を活性化していった事例であった。「田よりも縁」「お金よりも人とのつながりが大事なのだ。つながりが豊かになれば生活の質が保証され、安心・安全なコミュニティで幸福度の高い暮らしが実現できる。」
こうした社会づくりを目指す上で基盤となるのが地域社会であろう。公民館はその中心となって大きな役割を果たすことが今後求められていると言える。



▲ 鯖江市JK課 高橋氏



▶ ふくいの担い手プロジェクト (公社 福井青年会議所) 後藤氏